

『フェデリコ・ガルシア・ロルカと日本』

森直香[著]、晃洋書房、2020年

[評者]

能瀬品子

NOSE Akiko

フェデリコ・ガルシア・ロルカ (1898-1936) といえば、現在においてもスペイン内戦で殺された悲劇の犠牲者として多くの人々にイメージされているようだ。著者はロルカの作品以前にそのようなイメージが先行して語られることに残念な思いを抱いてきたのではないか。本書はスペインの詩人・劇作家であるロルカ作品の日本における受容について論じたものである。

1950年代のスペインではロルカの死に触れるのはタブーであった。このため情報がスペインから直接入ってくることはほとんどなく、フランス語や英語の文献に頼らざるを得なかった。それらの文献はほとんどが共和派の立場に立って書かれており、ロルカがファシスト陣営によって処刑された罪のない犠牲者としてその悲劇性が強調され、神格化がなされた。著者は日本においてもロルカが右派の手によって銃殺されたという伝記的事実は広く知られ、受容初期にはロルカの名を読者に知らしめるのに有利に働いただろうと推察する。そして1950年代を受容の初期¹として日本人研究者や翻訳者がロルカの死をめぐる状況と作品の関係をどのようにとらえていたかを考察し3つの立場があったと述べる。

第1の立場は、ロルカの死や政治性を作品評価と切り離して理解しようとしたものである。ロルカ作品の初期受容に貢献した3人の翻訳者、会田由、山田肇、小海永二はロルカの死の悲劇性が彼を有名にしたことは認めつつ、作品の文学的価値の高さや質の高さを強調している。また、三島由紀夫や尾崎宏次も「ロルカの死にばかり注目が集まり、作品自体が正当に評価されないことを危惧している」。著者はこのように少なからぬ読者が「ロルカの生涯や死や政治的文脈から切り離された形で作品が読まれることを望んだ」と分析する。

第2の立場は、ロルカの死と作品を結び付けて解釈したものである。渡辺淳、寺山修司、長谷川四郎は、ロルカの作品のなかに死を投影する解釈をとっている。また、第1の立場であった小海永二も1960年代にはロルカの死は「予感された死」であると著している。このことはフランス人研究

者フランソワ・ヌルシエの解釈——ロルカは作品の中で自らの死の運命を予言し、彼の死は宿命の成就に過ぎない——の影響を受けていると著者は説明している。

第3の立場は、ロルカの作品を死と結びつけて政治的に解釈しようとしたものである。谷川雁はロルカが右派により殺されたという事実から、作品の中に政治的メッセージを読み取ろうとした。しかし、ロルカの作品から政治思想などを読み取ることはできず失望して作品を批判するに至った。美術評論家の江原順は谷川に反論し、純粋にロルカ作品の芸術としての価値を評価しようとした。

以上のように、日本ではロルカの死と作品評価を切り離して理解しようと努め、作品と政治やイデオロギーを結び付けることは避けながらも、「作品の中に作者自身の死を投影するというある種矛盾した解釈」をとっていたと著者は結論づけている。

本書の主な内容は以上である。本書は多くの資料を受容された年代順に紹介しながら、国外での受容が日本における受容に与えた影響をも含めて受容の背景や要因を分析している。ロルカを語る際に一番問題になるのはロルカの死と作品を結びつけようとする風潮である。一般的に不幸な死に方により夭折した者は神話化されやすい。ましてやスペイン内戦の初期に殺され遺体も見つかっていないロルカの場合、その死にばかり注目が集まり、作品は容易にその死と結びつけられがちであった。当初、真相が明らかにならなかったことから多くの人びとの興味を惹いたのも事実である。ましてや、ロルカの作品がフランスなどスペイン以外の国を介して入ってきた日本において、彼の作品の評価以前にそれらと短絡的に結びつけられるのは仕方がない面があっただろう。1973年にイアン・ギブソンの『ロルカ・スペインの死²⁾』が翻訳され、「ロルカの死は1936年共和国スペインに反乱を起し、その後この国を長期間支配した政権のイデオロギーがもたらしたもの³⁾」という理解が定着するまでに、日本人研究者の間にはロルカの死についてさまざまな捉え方があった。

しかしながら、著者が分析したように、日本においてはロルカの死が作品と政治的に結び付けられることは少なかった。これは日本とヨーロッパの距離が離れているためスペインの情報が直接的に入っていないということもあっただろうが、日本の読者が冷静に作品を読み込んでいたともいえるのではないかと。評者はロルカの作品の魅力が人々に愛されたこととともに、多くの読者がロルカの死が過度に注目され作品の価値が見逃されることを恐れたため、ロルカの死と作品が直接的に政治的に結び付けられることが少なかったのではないかと、その代わりにヌルシエの影響もあり、ロルカの死が作品の中に投影される解釈が生じたのではないかと推量する。不

幸な死は作品解釈に影響を与えずにはおかないであろう。著者は作品の中に作者自身の悲劇的な死を投影するという解釈は、「作家としてのロルカにある種の神秘性を与え、作品に新たな魅力を与えているともいえる」と論じ、「作家自身の人生がパラテキストとして作品が結びつくことで新たな読みの可能性が生まれている」と述べている。そしてこのことはヴォルフガング・イーザーの受容理論に基づく日本人読者とロルカ作品の対話によって作品に付け加えられた新たな価値であると述べているが、この点について評者はもう少し研究が必要ではないかと考える。

これまで日本におけるロルカ作品の受容について、翻訳者や作家、批評家が個々に述べたものはあったが、受容史全体を論じたものはなかった。本書は日本においてロルカ作品が受容された過程をたどることによって受容の軌跡を明らかにするとともに、ロルカの死が直接的に作品評価に結びつかなかった理由として先人たちの受容があったことを指摘している。この受容体系が明確にされたことは著者の丹念な調査と研究の成果である。また、日本人による新たな読みの可能性を示唆しており、ハンス・ロベルト・ヤウスやイーザーの受容理論に基づく研究が期待される。本書は受容について編年形式で論じていることもあり、同じ翻訳者の受容が年代を追って出てくるという煩わしさが散見される。さらにロルカの詩の受容についての言及が少ないなどの点はあるが、巻末の参考文献や参考資料を含めて、ロルカ研究にとっての新しい里程標となっている。

[注]

- 1 ロルカの作品が初めて日本に紹介されたのは1930年のことであるが、戦前・戦中の日本におけるロルカに関する文献は二点だけである。このため著者は1950年代を受容の初期としている。
- 2 原典はIan Gibson, *La represión nacionalista de Granada en 1936 y la muerte de Federico García Lorca*, Paris Ruedo Ibérico, 1971である。
- 3 イアン・ギブソン『ロルカ』解説p.585、中央公論社、1997年